

「徳島における吉野川水害史から見たポスト3・11の社会的課題」

榎田美雄

過疎地の生き残り戦略に組み込まれたものとしての「災害」という視点

今回、東日本大震災で想定を越える高さの津波が東北の町や村を襲いました。当然、東南海大地震における津波の想定波高も変更になります。2011年12月21日の徳島県発表では、想定波高が従前の2～3倍になっていました。

冗談みたいな話ですが、地域に（あらたな）「絶望」はありません。もともと、助かるつもりの防災計画なんて立てていなかったからだと思います。むしろ、一種の明るさがあるのが、おもしろいところです。話題の対象になる（たとえ、津波被害の予想であっても）高揚感もあるでしょう。でも、それだけではないようなのです。いまなら、この波高の高さで、予算の増額を勝ち取ることができる、なんてこともこの明るさの原因の一部なのではないでしょうか。

「街おこし」というわけではありませんが、この予想をだすことによって、県としては、来年度の土木事業予算に国からの補助を多めに得られる見込みが増大しています（そういう目的だ、と朝日新聞徳島版は書いていました）。県内には、いま、そういうことで、不思議な明るさが漂っています。

「災害」があれば、「復旧予算」と「防災予算」がつかます。運が良ければ「移住予算」や「ダム」予算もつかます。それらを上手に組み合わせて、たとえ未来展望はなくても、「とりあえずの生」を生き抜くのが、徳島の山間部の住民と自治体の「戦略」だったように思われるのです。そうやって、国の法律と予算を駆使して、「右肩下がりの日常」を、彼/彼女らは、なんとかかんとか生きていたようなのです。まがりなりにも、ソフトランディングしていたようなのです。この、非目的志向的な、思わざる効果を機能させた高度に洗練された地域文化を社会学は、ちゃんと研究し、紹介しなければなりません。

榎田美雄（かしだ よしお、kashida@ias.tokushima-u.ac.jp）

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授。筑波大学大学院社会学専攻中退。専門は、相互行為分析、医療と福祉の社会学。

主要業績は、『いのちとライフコースの社会学』（藤村正之編：弘文堂、2011年）、『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』（串田秀也・好井裕明編：世界思想社、2010年）、訳書に、『医療現場の会話分析』（D. Maynard 著・岡田光弘と共訳：勁草書房、2004年）等。

「震災後の社会を考える カフェコモンズでの小さな集まりから」

渡邊 太

私は、大阪府高槻市にあるカフェコモンズ（café commons）で、毎週金曜日の夜に集まり、「コモンズ大学」と称して、ごはんを食べながら話をする集まりを開いている。カフェコモンズは、ひきこもりにかかわるNPOが運営するカフェで、協同組合運動やオルタナティブ経済に関心をもつ人たちが合流して作られた。いまは、福祉事業所として、（主に）精神障害者として認定された人たちの働く場所としても機能している。

コモンズ大学では、2011年4月から、公開講座「震災後の社会を考える」を開始し、第一回「原子力と社会」、第二回「震災のナショナリズム」、第三回「原発問題とフリーター」、第四回「東北から考える日本」、第五回「ひきこもり後の社会」を開催した。そこで様々な参加者たちと、今回の震災と原発事故をめぐって話をする

ことができた。不安、怖れ、怯え、怒り、憤りをあらかず感情のコミュニケーション。震災後に顕在化した問題は、じつは震災前から日本社会に潜んでいたのではないかということ。コモンズ大学の活動はきわめて小規模だが、こうした活動のなかで考えたこと、感じたことについて報告したい。

渡邊太（わたなべ ふとし）

大阪大学招聘研究員、関西大学ほか非常勤講師、コモンズ大学事務局、NPO法人日本スローワーク協会、NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト

専門は、文化社会学・宗教社会学。

著書『愛とユーモアの社会運動論』（北大路書房、2012年）、『聖地再訪

生駒の神々』（共著、創元社、2012年）、『カルトとスピリチュアリティ』（共著、ミネルヴァ書房、2009年）

、「空想するコモンズ 文化の実験を楽しむ場所へ」（『インパクション』178号、2011年）等。

「3.11以降とフェミニズムの課題/ 放射能汚染と再生産労働」

松本麻里

昨年の原発事故発生以降、各地で主に母親たちを中心とした放射能の計測活動、教育機関や行政への交渉、また自主的な学習会、避難者のネットワーク作りなどが活発に起こっている。こうした動きは、いまだその全貌が把握されていないものの、従来の「反原発」を課題として掲げる政治的活動とは、やや異なる位相で展開される、3.11以降の着実な実践の一領域を形成しているといえる。この動きに対してフェミニズムはどう向き合うことができるだろうか？ これまでのフェミニズムには母親の立場に立脚した運動を本質主義的なジェンダー構造の再生産に加担する危険性をはらんだ、「母性主義」と警戒する批判もあった。しかし、3.11以降のこうした動きについて「母性主義」「本質主義」と即断する批判は妥当だろうか？ まずはここ数か月の活動の実例等を詳細に検討していくことが必要ではないだろうか。報告では、80年代の反原発運動と当時のフェミニズムの議論と現在の実践の比較、またチェルノブイリ事故後を経由したマリア・ミース、クラウディア・フォン・ヴェールホフらの議論との比較を通して、主に「母親」を中心とする、3.11以降の実践を原子力災害に際しての、再生産労働の担い手からの「異議申し立て」であると同時に、放射能汚染下で生きざるを得ない時代のオルタナティブな実践として位置付けることを試みる。

松本麻里（まつもと まり）

一橋大学言語社会研究科修士課程修了。フェミニズム批評。『Vol』編集委員。

フェミニズムの視点から、1990年後半から社会運動に関わりつつ、インディペンデントで執筆。

- ・「海賊未満-海女と原発」『現代思想2011年7月』
- ・「水の重さと反原発」『現代思想2011年10月』
- ・インタビュー

「原発と再生産労働-フェミニズムの課題」

“Nuclear energy and reproductive labor-The task of Feminism”

Japan-fissures in the planetary apparatus

<http://www.jfissures.org/author/mari-matsumoto/>